

医の源に手当てと食養生あり

鈴木一策

蚊から教えられたこと

蚊に刺され痒みに耐えられず、思わず掻いてしまう。これが手当てでもあることに、私は気づいた。近代医学は、蚊に刺されることに、病原菌の伝染というマイナス・イメージしか抱かない。しかし、古くさい鍼灸・按摩療法を学んだ私は、掻いた部位が、みごと経絡の流れに沿っていることに気づく。蚊は鬱血した部位が血を吸いやすい部位であることを本能的に察知し、食らいつく。同じ場所に居て、蚊に刺される人とそうでない人とがいるのも、鬱血の多少が関係しているのではないか。掻くことによって鬱血は軽減する。だから手当てなのだ。この反応としての手当てに対

し、鬱血した部位を刺す蚊の営みは瀉血である。これも、一種の手当てになっている。蚊に刺されるまでもなく、鼻血が出たり、オデキができたり、等々にも治療効果のようなものがあるのだから。

瀉血療法の東西の違い

かつて瀉血療法というものがあり、蛭ひらを使ったりしていたように、蚊が刺すことも瀉血であることは疑いない。ヨーロッパにも床屋医者が瀉血していた時代があった。今の床屋の、あのグルグル回る目印の赤は動脈血、青は静脈血、白は包帯を象徴しているとか。床屋医者は大量の血液を瀉血したそうだが、そうした切っ

た・貼ったの伝統がメスによる手術と輸血（実は危険）の思想を生み出したのかもしれない。ところが東洋の瀉血は、蚊が吸い取るほどの微量の瀉血なのだ。現に、私は急性の咽喉炎には、瀉血で対処している。手の親指の爪のつけ根の小商こあやというツボ（太陰肺経）に縫い針で傷をつけ微量の瀉血によって、驚くほど急速に喉の痛みがなくなることを何度も体験している。北海道大学医学部によるアイヌの古老からの聞き取り調査によれば、幼児の肺炎は肛門に刃物で傷をつけ瀉血して癒していたという。肛門が肺と関連があることを、アイヌの伝統は熟知していたのである。身近な蚊のような生類せいりゆうから彼らも学んでいたに違いない。

聖草ヨモギと百草

つい最近まで、「蚊遣り」という言葉が生きていた。だが、高度経済成長以降、憎き害虫はことごとく化学物質の除虫剤によって撲滅されるようになって、「蚊取り」が支配的になった。「蚊帳」に象徴されるような蚊にあっちに行っていたく慎ましい文化は、窒息しかかっている。「蚊遣り」といえば、ヨモギが使われていた。ハムレット王子は、人間の死骸を大地に返す「蛆虫 worm」のことを、宇宙のみこと循環に従う「蛆虫女神」(Orma) (五幕一場)と呼んだが、日本のヨモギに当る「蛆虫草 worm-wood」(三幕二場、ワームには「蛇」の意味もある)を口にすると決定的なことは、「蛆虫草＝蛇草」の属名がアルテミスア、つま

り月の女神アルテミスに因むものであることだ。ヨーロッパの間やケルト文化圏では、ヨモギはその独特な香りから魔除け虫除けに使われた聖草であったのに、キリスト教は毒草の「苦ヨモギ」と見なし、月の女神アルテミスやヘカテを魔女として圧殺した。私はといえば、ほろ苦い蓬餅を味わい、胃薬として生葉を食し、蚊遣りとして活用している。沖縄では「フーチバロヨモギ」は今なお野菜である。また、ヨモギの葉を干し臼でついてできるモグサ（燃え草）の意らしい）はお灸に使われる。かつての日本人は、互いにお灸のしあいっこをしていた。経絡の発見に蚊が一役買っていたとしたら、お灸や按摩による手当ても、「神虫」の蚊から学んだものではないか、そう私は想像してしまう。

医の根源は手当て

もつとも、私は、自分自身の体の動きから、気の流れを実感したことがある。野口晴哉（一九一―一七六）のお弟子さんから整体術を学びつつあったころ、勝手に手が持ち上がり気の流れを体感したのだった。その流れが経絡図の教える流れと一致していた。だから、古人は、身近な生類と自らの体感とから、気血の流れを察知していたのだと思われる。ところで、野口は、無意識に手が行ってなされるものこそ「手当て」だと言ひ、寝相こそ根源的な「手当て」だと主張していた。思わず頭を掻いてしまう、くしゃみをする、あくびをする等々。まさにそうした無意識の「手当て」